

ごあいさつ



公益社団法人 日本 WHO 協会
理事長 関 淳一

5月22日から開催された、第70回WHO年次総会においてマーガレット・チャン事務局長の後任として、エチオピアのテドロス・アダノム・ゲブレイエス（Tedros Adhanom Ghebreyesus）博士が選出されました。WHOとしては、アフリカ地域からは初めての事務局長となります。任期は2017年7月1日から5年間です。

また、この事務局長選挙に先立って5月1日にWHO神戸センター（WKC）のアレックス・ロス所長が人事異動により、WHO本部の保健システムとイノベーション部門事務局長補付アドバイザーに転任され、後任にサラ・ルイズ・バーバー（Sarah Louise Barber）博士が就任されました。ロス前所長は5年に亘る在任期間中に、世界中が直面する人口の高齢化と平均寿命の伸びの中でのユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）及び地域レベルでの保健・社会サービスのあり方等について、様々な研究プロジェクトの立ち上げを主導されました。これらは、日本を含む世界中の国々が、今後取り組まねばならない最重要課題であります。ロス前所長はこれらの業績も含めて、在任中の功績が評価され、5月17日にWKCとして初めて兵庫県功労賞（国際協力功労賞）を受賞されました。

新たに就任されたバーバー所長もWKCのこれ迄の人口の高齢化への対応なども含めて、世界の各国が新たな課題に対応できる保健・医療制度を構築できるような質の高い研究を進めていく強い決意を示しておられます。WKCが引き続き、これらの分野で益々発展されることを期待いたしております。

ところで、私共（公社）日本WHO協会では「より良い医科・歯科連携」を活動テーマの一つとして

おります。その一環として、去る2月24日に「口の健康 Part3」と題するフォーラムを開催いたしました。今回、そのフォーラムで講師をお勤めいただいた、大阪歯科大学教授の田中昌博先生と大阪府歯科医師会専務理事の深田拓司先生のご講演録を、当「目で見えるWHO」63号に掲載させて頂きました。各々、非常にわかりやすく、また意味深いお話で、是非ご一読頂きたいと思っております。

また、去る2月17日に、当協会の理事でもあり、大阪大学大学院人間科学研究科の教授を17年間勤められ、3月末に定年退職された中村安秀先生の最終講義が行われ、小生も拝聴する機会に恵まれました。講義のテーマは「だれひとり取り残さない国際保健医療をめざして」でした。国際保健医療に携わられた半生を振り返っての講義は、極めて説得力があり、強く心に残りました。この度、幸いにもその時の講義録を当機関誌に掲載させていただくことができました。

また当機関誌には、昨年10月から半年間に亘りジュネーブのWHO本部でボランティアとしての活動を経験された、群馬大学大学院保健学研究科の時田佳治先生に、その時の経験を中心に「医療の質を改善するためのWHOの活動」と題してご寄稿頂きました。先生は、群馬大学で実践されている多職種連携教育（IPE）をベースにして今回WHO本部で多くのことを経験され、また学ばれた様子がよくわかり、今後群馬大学のみならず日本の医学教育の分野でIPEのさらなる発展に寄与されるものと思っております。

（平成29年5月）